

# 風知草

特別編集委員 山田孝男

秋の自民党総裁選は、3

選をうかがう安倍晋三の独走、石破茂が粘り、岸田文雄は離脱、野田聖子苦戦中——という展開。

このレースの歴史的な意味は、挑戦者がそれぞれ派閥の伝統を背負い、△保守政治のバランス△を探っているところにある。

1990年代の政界再編をリードした理論家で、連立政権の閣僚だった田中秀征(77)▽福山大客員教授▽によれば、政治家は所属グループの「源流からの思想」に縛られる。

政治家は「どこへ向かうか」と同時に、「どこから来たか」を厳しく問われる

ものだから——。

安倍首相の憲法観や歴史認識が自民党の創業者の一人、岸信介元首相(安倍の祖父)譲りであることはよく知られている。

## 「別の保守」への道

他方、総裁選の挑戦者たちの背景は違う。

石破がかつて仕えた田中角栄元首相も、岸田派の開祖・池田勇元首相も、根っこは自民党のもう一つの源流である吉田茂元首相につながっている。

従来の自民党史は、首相を多く輩出した吉田の系譜を「保守本流」、岸元首相は「保守傍流」と説明する

ことが多かった。

野田聖子は三木武夫元首相系の派閥にいた。田中秀征は「保守本流」の思想的源流として石橋湛山元首相を重視する。三木は岸に遠く、石橋を支えた。

田中秀征は、岸元首相に始まり、安倍首相が継いだ流れこそ「自民党本流」だと主張している(田中「自

民党本流と保守本流」講談社、7月新刊)。

岸は「近代史上で有数の優れた指導者」(同書)であり、自民党結成当時の中心だった。岸が深く関わった立憲の基本文書は「反社会主義」と「憲法改正」を押し出していた。

一方、「保守本流」は冷戦的な思考が比較的抑制され、護憲的だった。

つまるところ、今回の総裁選は、「自民党本流」独走に「保守本流」が挑む構図になっている。

田中に言わせれば、「保守本流」の最後の首相は小渕恵三(2000年、63歳で死去)だった。

その後は、森喜朗▽小泉純一郎▽安倍晋三▽福田康夫——と、少なくとも人脈的には岸元首相系の「自民党本流」首相が継投。麻生太郎(吉田元首相の孫)だけが例外だった。

この間、絶えず安保政策が問われたが、改憲には現実味がなかった。

唯一、安倍首相が改憲に踏み込んだが、国民との対話が足りず、政治手法への不満が蓄積した。

「保守本流」は嫡流の本命・加藤紘一(16年、77歳で死去)が森内閣打倒に失敗(00年、加藤の乱)して以来、沈滞した。

昨秋、小池百合子東京都知事のつくった新党が「非安倍」の保守票を吸収するかと思われたが、期待はたちまちしぼんだ。

小池現象は、「新しい保守」を求めながら、行き場のない民意のうねりを感じさせた——という田中の指摘は的を射ている。

岸田は降りた。いま「別の保守」へひた走る先頭走者は石破である。

野党・立憲民主党の枝野幸男も「自分は保守」と割り切る時代。「保守」の神髓は「国民の日常の運命を引き受ける決意と能力」と田中秀征は言う。

総裁選まで50日余。「新しい保守を求めながら、行き場のない民意」を呼び込めるか。石破の決意と能力が試される。(敬称略)

毎週月曜日に掲載

2018.7.30



題字・絵 五十嵐晃